

天狗党の乱

## 天狗党の乱

天狗党は幕末、水戸藩における尊皇攘夷の過激派のこと。これに対して反天狗派を諸生党という。天狗党の乱は筑波山事件ともいい、元治元年（一八六四年）尊皇攘夷を決行しようと筑波山に兵をあげた事件で主導者は田丸稻之衛門（この古文書では稻衛門）、武田耕雲斎、藤田小四郎らである。諸藩の連合軍と戦ったが、町奉行であった田丸稻之衛門はここに書かれているように湊（那珂湊）の戦いで捕えられ処刑された。武田耕雲斎、藤田小四郎らは京へ向かう途上、越前に走って加賀藩に降伏し、その後敦賀で斬られた。

天狗の名は自ら名乗ったのではなく「成りあがり者」で「天狗になつてゐる」という意味の蔑称で呼ばれたのである。各人それぞれこれに書かれているように数百石の高持ちであり、四百人余合計すると四万七千石余となることが書かれている。いわゆる水戸藩内で起きたクーデターである。

少し遡るが事件の背景には朝廷から水戸藩にもたらした「戊午の密勅」とよばれる事件があった。攘夷の勅命を幕府ではなく直接水戸藩に告げたため、これに対する処置で意見が分裂し、幕府とも対立する過激派が起こった。安政に大獄をきっかけに起きた桜田門外の変もこの過激派の一部によるものである。その集団が天狗党へと変遷していったのである。

## この古文書について

この古文書は敵味方それぞれの名前が書き連ねてある。幕府あるいは水戸藩の反天狗派の誰かが書き記したものである。裏表紙に書かれた名前の鳥見役山本元吉がこれを書いたか、所持していたものと推測される。戦いにおいて先駆け軍功者の名前が記録されているので鳥見役の山本元吉がこの任にあたって記録したものであろう。

天狗党はここに記名された二十八人の他に三百七十三人とあるので四百一人ということになる。書かれた日付を辿ると元治元年七月二十三日から九月二十一日までの次のような記録である。

- 七月二十三日 笠間から諸生党集結
- 七月二十四日 大田町（常陸大田）にて初戦
- 七月二十五日 天狗党十四人討取られる
- 八月八日 吉田明神山にて二戦目開始
- 八月十一日 磯之濱（那珂湊）に天狗党集結戦闘となる
- 八月二十四日 幕府連合軍が弘道館に集結
- 九月八日 栗原台にて戦闘、土浦にて百姓一揆起こる
- 九月十六日 田丸稻之衛門ら処刑される
- 九月二十一日 土浦にて戦闘、二十五人打首となる

此之同不七月之書

生勢組也

七月廿四日夜初而戰

天狗大平勢田丸稻右衛門組大田町  
夜□□繰込七月廿五日朝藤から  
町初而戰天狗勢十四人討取二度  
目八月八日松平大炊頭吉田明神  
山方砲発ス同月十一日朝天狗勢  
磯之濱繰込同月八日脱町岩  
船ニ生勢組屯所故二報(放)火いたし  
同十六日朝川上討死天狗勢八月  
廿二日五丁矢場新情館福地屋  
船ニ生勢組没死不取討取以中一  
日十方朝川上討死云狗勢八月  
廿二日五丁矢場新情館福地屋

笠間方七月廿三日

生勢組込

七月廿四日夜初而戰

天狗大平勢田丸稻右衛門組大田町

夜□□繰込七月廿五日朝藤から

町初而戰天狗勢十四人討取二度

目八月八日松平大炊頭吉田明神

山方砲発ス同月十一日朝天狗勢

磯之濱繰込同月八日脱町岩

船ニ生勢組屯所故二報(放)火いたし

同十六日朝川上討死天狗勢八月

廿二日五丁矢場新情館福地屋

浦へ繰込日大方五区八月廿四日二公辺之  
 勢福而水戸弘道館へ繰込夫方小川  
 館新情館江破り塩崎并勝倉出張二相成  
 千貳百石 御老中 升田伊賀守  
 三百石 山岡喜八郎  
 四百石 下丁奉行 早見口之進  
 八百石 三木助太夫  
 六百石 同 富田三保之助  
 貳百石 御目付 小池源太左衛門  
 天狗組  
 常州菱上  
 壹万石 御連枝 松平大炊頭  
 六百石 御老中 大久保仁吾左衛門  
 七百石 大番頭 鳥井瀬兵衛  
 八百石 御老中 柳原新左衛門  
 六百石 大番頭 賀藤八郎太夫

浦へ繰込日大方五区八月廿四日二公辺之  
 勢福而水戸弘道館へ繰込夫方小川  
 館新情館江破り塩崎并勝倉出張二相成  
 千貳百石 御老中 升田伊賀守  
 三百石 山岡喜八郎  
 四百石 下丁奉行 早見口之進  
 八百石 三木助太夫  
 六百石 同 富田三保之助  
 貳百石 御目付 小池源太左衛門  
 天狗組  
 常州菱上  
 壹万石 御連枝 松平大炊頭  
 六百石 御老中 大久保仁吾左衛門  
 七百石 大番頭 鳥井瀬兵衛  
 八百石 御老中 柳原新左衛門  
 六百石 大番頭 賀藤八郎太夫

浦へ繰込日大方五区八月廿四日二公辺之  
 勢福而水戸弘道館へ繰込夫方小川  
 館新情館江破り塩崎并勝倉出張二相成  
 千貳百石 御老中 升田伊賀守  
 三百石 山岡喜八郎  
 四百石 下丁奉行 早見口之進  
 八百石 三木助太夫  
 六百石 同 富田三保之助  
 貳百石 御目付 小池源太左衛門  
 天狗組  
 常州菱上  
 壹万石 御連枝 松平大炊頭  
 六百石 御老中 大久保仁吾左衛門  
 七百石 大番頭 鳥井瀬兵衛  
 八百石 御老中 柳原新左衛門  
 六百石 大番頭 賀藤八郎太夫

中山民部  
 向井岡左衛門  
 坂田鉄藏  
 岡田新太郎  
 谷鉄藏  
 門三左衛門  
 齊田勉助  
 松平左衛門  
 新井新八郎  
 牧彦之進  
 田村  
 五百石 寺社奉行  
 同 中山民部  
 同 向井岡左衛門  
 同 坂田鉄藏  
 同 岡田新太郎  
 同 谷鉄藏  
 同 門三左衛門  
 同 齊田勉助  
 同 松平左衛門  
 同 新井新八郎  
 同 牧彦之進  
 同 田村

五百石 寺社奉行  
 同 中山民部  
 同 向井岡左衛門  
 同 坂田鉄藏  
 同 岡田新太郎  
 同 谷鉄藏  
 同 門三左衛門  
 同 齊田勉助  
 同 松平左衛門  
 同 新井新八郎  
 同 牧彦之進  
 同 田村

〃 赤坂長 小多部  
 〃 赤坂長 赤田彦右衛門  
 〃 赤坂長 伊賀守倅  
 〃 赤坂長 林 五郎三郎  
 〃 赤坂長 大田原尽内  
 〃 赤坂長 立原朴次郎  
 〃 赤坂長 庄司齊吉  
 〃 赤坂長 三木源八  
 〃 赤坂長 三木孫太夫  
 〃 赤坂長 岡左衛門  
 〃 赤坂長 山中新左衛門  
 〃 赤坂長 梶 清左衛門  
 〃 赤坂長 橋奉行  
 〃 赤坂長 松平大炊頭付人  
 〃 赤坂長 百石

|     |         |        |
|-----|---------|--------|
| 同   | 東郡奉行    | 小多部    |
| 五百石 | 大番頭     | 赤田彦右衛門 |
|     | 伊賀守倅    |        |
| 三百石 | 館奉行     | 林 五郎三郎 |
| 八百石 | 大番頭     | 大田原尽内  |
| 三百石 | 御目付     | 立原朴次郎  |
| 同   |         | 庄司齊吉   |
| 同   |         | 三木源八   |
| 貳百石 | 御先手頭    | 三木孫太夫  |
| 同   |         | 岡左衛門   |
| 同   | 松平大炊頭付人 | 山中新左衛門 |
| 百石  | 橋奉行     | 梶 清左衛門 |

三好衛門八

元應二年三月廿九日  
高田百七千石餘

此名前之者磯之濱祝丁湊  
平磯村辺ニ迫都合三里之間  
屯いたし併湊へ御大場其外  
北府御穀機動之構兵糧  
玉葉二分ニ有之由合戦前  
有之勝敗一切知レ不申候  
磯ノ濱固 西福寺  
町奉行 田丸稻右衛門  
湊船場固 升田伊賀守

式百石  
三好衛門八

此面々外三百七拾三人  
高四万七千石餘

此名前之者磯之濱祝丁湊

平磯村辺ニ迫都合三里之間

屯いたし併湊へ御大場其外

北府御穀機動之構兵糧

玉葉二分ニ有之由合戦前

有之勝敗一切知レ不申候

磯ノ濱固 西福寺

町奉行 田丸稻右衛門

湊船場固

升田伊賀守

祝町固

山岡喜八郎

湊大砲場御固

大井寺

磯之濱曲り松水門固

御目付

磯之濱曲り松水門固

黒沢新九郎

戸田越中守家来

田中源藏

戸田越中守家来

九月十六日

戸田七兵衛粹誠一郎太夫

戸田越中守家来

磯村埜易正丸

田中源藏家来

戸田源藏家来

磯 伊口半兵衛

磯 伊口半兵衛

上増神藏



今瀬織部  
日景入道春雄  
獄門

三景我次右衛門 石橋嘉之丞  
梅沢左次右衛門 田丸稻右衛門  
新屋辰次右衛門 田丸福右衛門  
田中原藏 山岡兵部  
磯之濱ニタテコモル後ニ改心イタシ  
水府江返ル右五人橋屋入  
大田原傳右衛門 国見甚右衛門  
向井易左衛門  
美部升之助 松原源□□

同 今瀬織部  
同 □入道春雄

獄門 同  
立原□次郎 大膳彦之丞  
□□□□□

梅沢駒太郎 升田伊賀守

□□□□□  
齊藤左次右衛門 右同断  
田丸稻右衛門

田中原藏 右同断  
山岡兵部

磯之濱ニタテコモル後ニ改心イタシ

水府江返ル右五人橋屋入  
大田原傳右衛門 国見甚右衛門

向井易左衛門  
美部升之助 松原源□□

九月八日夜土浦辺ニ而土浦□人数□  
 百姓一揆ニ而討取之候由  
 植原伊平次 渡辺亀五郎  
 植原伊平次 馬役  
 大宮八三郎 細谷勘助  
 □ □ 菊地幾太郎  
 □ □ 内膳  
 書役 □ □ □ □  
 渡辺 関根長右衛門  
 軍地市左衛門 斎藤宗之助  
 右郎十二人之者逃去  
 大将  
 三木宇右衛門 廣岡 之助  
 女房まち 大 長貞太郎  
 花村 年廿二才

宇右衛門倅  
三木藤之助

掃曾根左三郎  
掛札六人

当中納言様御家来  
生勢組

八百石 市川三左衛門

千弍百石御老中 佐藤凶書

五百石 鈴木岩見守

六百石 御老中 伊藤七右衛門

宇右衛門倅  
三木藤之助

掃曾根左三郎

掛札六人

当中納言様御家来

生勢組

八百石

市川三左衛門

千弍百石御老中

佐藤凶書

五百石

鈴木岩見守

六百石

御老中

伊藤七右衛門

八百石御実院番頭赤林三郎兵衛  
 千石 石田  
 同 御家老 戸田銀次郎  
 六百石 岡崎  
 五百石 大番頭 渡辺半助  
 千百石 御家老 笥助太夫  
 当家中  
 大田原清左衛門

八百石御実院番頭赤林三郎兵衛  
 千石 石田  
 同 御家老 戸田銀次郎  
 六百石 岡崎  
 五百石 大番頭 渡辺半助  
 千百石 御家老 笥助太夫  
 当家中  
 大田原清左衛門

九月八日栗原台新田  
 合戦之通  
 や 中山牧之助 岡部豊吉  
 て 野山三五郎 進士仙吉  
 て 尾木初太郎 長沢忠吉  
 て 林 作之丞 荒木  
 荻野宗十郎 吉田元吉  
 や 賀島浦之助 矢島熊之助  
 や 高野小三郎 拾三人  
 壱番二先かけ之人  
 高野小三郎 拾三人

子九月八日栗原台□新田□□

合戦之通□

や 中山牧之助 岡部豊吉

て

野山三五郎 進士仙吉

て

尾木初太郎 長沢忠吉

て

林 作之丞 荒木

て

荻野宗十郎 吉田元吉

や

賀島浦之助 矢島熊之助

や

高野小三郎 拾三人

壱番二先かけ之人

《説明》

や 槍

て 鉄砲

深見 伴 黒木文五郎  
 藤井 史 河野左平太  
 高木 仲吾  
 追々ニ繰出し相成候  
 土浦領ニ而  
 首廿五人打首ニ相成候  
 九月廿一日  
 九月廿一日山中 平畑戦  
 先かけ  
 中山牧之助 長島新之助

や て

深見 仲 黒木文五郎

て て

藤井 史 河野左平太

て

高木 仲吾

五人 □□人数拾八人

追々ニ繰出し相成候

土浦領ニ而

首廿五人打首ニ相成候

九月廿一日

九月廿一日山中 平畑戦

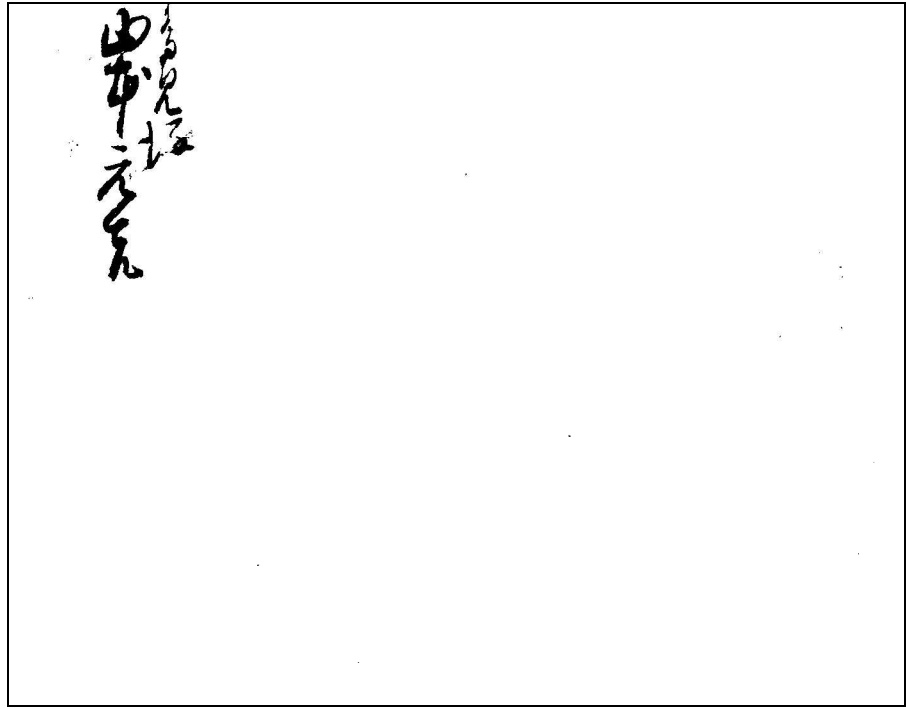
先かけ

中山牧之助 長島新之助

(十三)

河野哲家 若林小三郎  
 林作之丞 五人  
 追々繰出し 二相成候  
 外ニ拾式人 □□□共追々名前  
 相改書候

河野 三郎 若林小三郎  
 林作之丞 五人  
 追々繰出し 二相成候  
 外ニ拾式人 □□□共追々名前  
 相改書候



鳥見役  
山本元吉

鳥見役について

鳥見役は江戸幕府の職名で若年寄配下の鳥見組頭に属し、將軍の御鷹場を管理し密猟の禁制などにあたった。

職務上地理に詳しいのでこのような合戦の状況を監察して報告する役を与えられたと思われる。古文書のサイズは横半帳(ほぼB6版の横綴じ)である。このサイズは持ち運びに便利なので覚書や出納帳、道中記などに用いる。いわばメモ帳として利用されるものなので実際に現地で書かれたものであろう。

これらを元に正規の報告が別になされたと思われる。その時点でこのメモ帳の役目が無くなったが、その後誰かに保管されていて今日に至ったものである。途中経過のメモ書きではあるが歴史を語る現実感のある史料といえる。